盈虚

中島敦

青空文庫

衛の靈公の三十九年と云ふ年の秋に、太子蒯※が父の命を受けて齊に使したことがある。途に宋の國を過ぎた時、畑に耕す農夫共が妙な唄を歌ふのを聞いた。

既定爾婁豬
盍歸吾艾

牝豚はたしかに遣つた故
早く牡豚を返すべし

衛の太子は之を聞くと顔色を變へた。思ひ當ることがあつたのである。

父・靈公の夫人（といつても太子の母ではない）南子は宋の國から來てゐる。容色よりも寧ろ其の才氣で以てすつかり靈公をまるめ込んでゐるのだが、此の夫人が最近靈公に勸め、宋から公子朝といふ者を呼んで衛の大夫に任じさせた。宋朝は有名な美男である。衛に嫁ぐ以前の南子と醜關係があつたことは、靈公以外の誰一人として知らぬ者は無い。二人の關係は今衛の公宮で再び殆どおほつぴらに續けられてゐる。宋の野人の歌うた牝豚牡豚とは、疑ひもなく、南子と宋朝とを指してゐるのである。

太子は齊から歸ると、側臣の戲陽速を呼んで事を謀つた。翌日、太子が南子夫人に挨拶に出た時、戲陽速は既に匕首を呑んで室の一隅の幕の陰に隱れてゐた。さりげなく話をしながら太子は幕の陰に目くばせをする。急に臆したものか、刺客は出て來ない。三度合圖をしても、たゞ黒い幕がごそ〳〵搖れるばかりである。太子の妙なそぶりに夫人は氣が付いた。太子の視線を辿り、室の一隅に怪しい者の潛んでゐるのを知ると、夫人は悲鳴を擧げて奥へ跳び込んだ。其の聲に驚いて靈公が出て來る。夫人の手を執つて落着けようとするが、夫人は唯狂氣のやうに「太子が妾を殺します。太子が妾を殺します」と繰返すばかりである。靈公は兵を召して太子を討たせようとする。其の時分には太子も刺客も疾うに都を遠く逃げ出してゐた。

宋に奔り、續いて晉に逃れた太子蒯※は、人毎に語つて言つた。淫婦刺殺といふ折角の義擧も臆病な莫迦者の裏切によつて失敗したと。之も矢張衛から出奔した戲陽速が此の言葉を傳へ聞いて、斯う酬いた。とんでもない。こちらの方こそ、すんでの事に太子に裏切られる所だつたのだ。太子は私を脅して、自分の義母を殺させようとした。承知しなければ屹度私が殺されたに違ひないし、もし夫人を巧く殺せたら、今度は必ず其の罪をなすりつけられるに決つてゐる。私が太子の言を承諾して、しかも實行しなかつたのは、深謀遠慮の結果なのだと。

晉では當時范氏中行氏の亂で手を燒いてゐた。齊・衛の諸國が叛亂者の尻押をするので、容易に埒があかないのである。

晉に入つた衛の太子は、此の國の大黒柱たる趙簡子の許に身を寄せた。趙氏が頗る厚遇したのは、此の太子を擁立することによつて、反晉派たる現在の衛侯に楯突かうとしたに外ならぬ。

厚遇とはいつても、故國にゐた頃の身分とは違ふ。平野の打續く衛の風景とは凡そ事變つた・山勝ちの絳の都に、侘しい三年の月日を送つた後、太子は遙かに父衛公の訃を聞いた。噂によれば、太子のゐない衛國では、已むを得ず蒯※の子・輒を立てゝ、位に即かせたといふ。國を出奔する時後に殘して來た男の兒である。當然自

分の異母弟の一人が選ばれるものと考へてゐた蒯※は、一寸妙な氣がした。あの子供が衞侯だと？　三年前のあどけなさを考へると、急に可笑しくなつて來た。直ぐにも故國に歸つて自分が衞侯となるのに、何の造作も無いやうに思はれる。

亡命太子は趙簡子の軍に擁せられて意氣揚々と黄河を渡つた。愈衞の地である。戚の地迄來ると、しかし、其處からは最早一歩も東へ進めないことが判つた。太子の入國を拒む新衞侯の軍勢の邀撃に遇つたからである。戚の城に入るのでさへ、喪服をまとひ父の死を哭しつゝ、土地の民衆の機嫌をとりながらはひらなければならぬ始末であつた。事の意外に腹を立てたが仕方が無い。故國に片足突つ込んだ儘、彼は其處に留まつて機を待たねばならなかつた。それも、最初の豫期に反し、凡そ十三年の長きに亙つて。

最早（曾ては愛らしかつた）己の息子の輒は存在しない。己の當然嗣ぐべき位を奪つた・そして執拗に己の入國を拒否する・貪欲な憎むべき・若い衞侯が在るだけである。曾ては自分の目をかけてやつた諸大夫連が、誰一人機嫌伺ひにさへ來ようとしない。みんな、あの若い傲慢な衞侯と、それを輔ける・しかつめらしい老獪な上卿・孔叔圉（自分の姉の夫に當る爺さんだが）の下で、蒯※などといふ名前は昔からてんで聞いたこともなかつたやうな顔をして樂しげに働いてゐる。

明け暮れ黄河の水ばかり見て過した十年餘りの中に、氣まぐれで我が儘だつた白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に成上つてゐた。

荒涼たる生活の中で、唯一つの慰めは、息子の公子疾であつた。現在の衞公輒とは異腹の弟だが、蒯※が戚の地に入ると直ぐに、母親と共に父の許に赴き、其處で一緒に暮らすやうになつたのである。志を得たならば必ず此の子を太子にと、蒯※は固く決めてゐた。息子の外にもう一つ、彼は一種の棄鉢な情熱の吐け口を鬪雞戲に見出してゐた。射倖心や嗜虐性の滿足を求める以外に、逞しい雄雞の姿への美的な耽溺でもある。餘り裕かでない生活の中から莫大な費用を割いて、堂々たる雞舍を連ね、美しく強い雞共を養つてゐた。

孔叔圉が死に、其の未亡人で　都と戚との間を往復した。太子は、志を得た曉には汝を夫人に取立て死罪に抵る咎あるも三度迄は許さうと良夫に約束し、之を手先としてぬかり無く策謀を運らす。

周の敬王の四十年、閏十二月某日蒯※は良夫に迎へられて長驅都に入つた。薄暮女裝して孔氏の邸に潛入、姉の伯姫や揮良夫と共に、孔家の當主衞の上卿たる・甥の孔※（伯姫からいへば息子）を脅し、之を一味に入れてクウ・デ・タアを斷行した。子・衞侯は即刻出奔、父・太子が代つて立つ。即ち衞の莊公である。南子に逐はれて國を出てから實に十七年目であつた。

莊公が位に立つて先づ行はうとしたのは、外交の調整でも内治の振興でもない。それは實に、空費された己の過去に對する補償であつた。或ひは過去への復讐であつた。不遇時代に得られなかつた快樂は、今や性急に且つ十二分に充たされねばならぬ。不遇時代に慘めに屈してゐた自尊心は、今や俄かに傲然と膨れ返らねばならぬ。不遇時代に己を虐げた者には極刑を、己を蔑んだ者には相當な懲しめを、己に同情を示さなかつた者には冷遇を與へねばならぬ。己の

亡命の因であつた先君の夫人南子が前年亡くなつてゐたことは、彼にとつて最大の痛恨事であつた。あの姦婦を捕へてあらゆる辱しめを加へ其の揚句極刑に處してやらうといふのが、亡命時代の最も愉しい夢だつたからである。過去の己に對して無關心だつた諸重臣に向つて彼は言つた。余は久しく流離の苦を嘗め來たつた。どうだ。諸子にもたまにはさういふ經驗が藥だらうと。此の一言で直ちに國外に奔つた大夫も二三に止まらない。姉の伯姬と甥の孔※とには、固より大いに酬いる所があつたが、一夜宴に招いて大いに醉はしめた後、二人を馬車に乘せ、御者に命じて其の儘國外に驅り去らしめた。衞侯となつてからの最初の一年は、誠に憑かれた様な復讐の月日であつた。空しく流離の中に失はれた青春の埋合せの爲に、都下の美女を漁つては後宮に納れたことは附加へるまでもない。

前から考へてゐた通り、己と亡命の苦を共にした公子疾を彼は直ちに太子と立てた。まだほんの少年と思つてゐたのが、何時しか堂々たる青年の風を備へ、それに、幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて來たせゐか、年に似合はぬ無氣味な刻薄さをチラリと見せることがある。幼時の溺愛の結果が、子の不遜と父の讓歩といふ形で、今に到る迄殘り、はたの者には到底不可解な氣の弱さを、父は此の子の前にだけ示すのである。此の太子疾と、大夫に昇つた渾良夫とだけが、莊公にとつての腹心といつてよかつた。

或夜、莊公は渾良夫に向つて、先の衞侯輒が出奔に際し累代の國の寶器をすつかり持去つたことを語り、如何にして取戻すべきかを計つた。良夫は燭を執る侍者を退席させ、自ら燭を持つて公に近付き、低聲に言つた。亡命された前衞侯も現太子も同じく君の子であり、父たる君に先立つて位に在られたのも皆自分の本心から出たことではない。いつそ此の際前衞侯を呼戻し、現太子と其の才を比べて見て優れた方を改めて太子に定められては如何。若し不才だつたなら、其の時は寶器だけを取上げられれば宜い譯だ。……

其の部屋の何處かに密偵が潛んでゐたものらしい。愼重に人拂ひをした上での此の密談が其の儘太子の耳に入つた。

次の朝、色を作した太子疾が白刃を提げた五人の壯士を從へて父の居間へ闖入する。太子の無禮を叱咤するどころではなく、莊公は唯色蒼ざめて戰くばかりである。太子は從者に運ばせた牲豚を殺して父に盟はしめ、太子としての己の位置を保證させ、さて揮良夫の如き奸臣はたちどころに誅すべしと迫る。あの男には三度迄死罪を免ずる約束がしてあるのだと公が言ふ。それでは、と太子は父を威すやうに念を押す。四度目の罪がある場合には間違ひなく誅戮なさるでせうな。すつかり氣を呑まれた莊公は唯々として「諾」と答へるほかは無い。

翌年の春、莊公は郊外の遊覽地籍圃に一亭を設け、墻塀、器具、緞帳の類を凡て虎の模樣一式で飾つた。落成式の當日、公は華やかな宴を開き、衞國の名流は綺羅を飾つて悉く此の地に會した。渾良夫はもと〳〵小姓上りとて派手好みの伊達男である。此の日彼は紫衣に狐裘を重ね、牡馬二頭立の豪奢な車を驅つて宴に赴いた。自由な無禮講のこととて、別に劍を外しもせずに食卓に就き、食事半ばにして暑くなつたので、裘を脫いだ。此の態を見た太子は、いきなり良夫に躍りかかり、胸倉を掴んで引摺り出すと、白刃を其の鼻先

に突きつけて詰つた。君寵を恃んで無禮を働くにも程があるぞ。君に代つて此の場で汝を誅するのだ。

腕力に自信の無い良夫は強ひて抵抗もせず、莊公に向つて哀願の視線を送りながら、叫ぶ。嘗て御主君は死罪三件まで之を免ぜんと我に約し給うた。されば、假令今我に罪ありとするも、太子は刃を加へることが出來ぬ筈だ。

三件とや？　然らば汝の罪を數へよう。汝今日、國君の服たる紫衣をまとふ。罪一つ。天子直參の上卿用たる衷甸兩牡（ちゅうしょうりょうぼ）の車に乘る。罪二つ。君の前にして裘を脱ぎ、劍を釋（と）かずして食ふ。罪三つ。それだけで丁度三件。太子は未だ我を殺すことは出來ぬ、と、必死にもがきながら良夫が叫ぶ。

いや、まだある。忘れるなよ。先夜、汝は主君に何を言上したか？　君侯父子を離間しようとする佞臣奴！

良夫の顔色がさつと紙の様に白くなる。

之で汝の罪は四つだ。といふ言葉も終らぬ中に、良夫の頸はがつくり前に落ち、黒地に金で猛虎を刺繍した大緞帳に鮮血がさつと迸る。

莊公は眞蒼な顔をした儘、默つて息子のすることを見てゐた。

晉の趙簡子の所から莊公に使が來た。衞侯亡命の砌、及ばず乍ら御援け申した所、歸國後一向に御挨拶が無い。御自身に差支へがあるなら、せめて太子なりと遣はされて、晉侯に一應の御挨拶がありたい、といふ口上である。かなり威猛高な此の文言に、莊公は又しても己の過去の慘めさを思出し、少からず自尊心を害した。國内に未だ紛爭（ごたごた）が絶えぬ故、今暫く猶豫され度い、と、取敢へず使を以て言はせたが、其の使者と入れ違ひに衞の太子からの密使が晉に届いた。父衞侯の返辭は單なる遁辭で、實は、以前厄介になつた晉國が煙たさ故の・故意の延引なのだから、欺されぬやうに、との使である。一日も早く父に代り度いが爲の策謀と明らかに知れ、趙簡子も流石に些か不快だつたが、一方衞侯の忘恩も又必ず懲さねばならぬと考へた。

其の年の秋の或夜、莊公は妙な夢を見た。

荒涼たる曠野に、檐（のき）も傾いた古い樓臺が一つ聳え、そこへ一人の男が上つて、髮を振り亂して叫んでゐる。「見えるわ。見えるわ。瓜、一面の瓜だ。」見覺えのあるやうな所と思つたら其處は古の昆吾氏の墟（あと）で、成程到る所累々たる瓜ばかりである。小さき瓜を此の大きさに育て上げたのは誰だ？　慘めな亡命者を時めく衞侯に迄守り育てたのは誰だ？　と樓上で狂人の如く地團駄を踏んで喚いてゐる彼の男の聲にも、どうやら聞き憶えがある。おやと思つて聞き耳を立てると、今度は莫迦にはつきり聞えて來た。「俺は渾良夫（こんりゃうふ）だ。俺に何の罪があるか！　俺に何の罪があるか！」

莊公は、びつしより汗をかいて眼を覺した。いやな氣持であつた。不快さを追拂はうと露臺へ出て見る。遲い月が野の果に出た所であつた。赤銅色に近い・紅く濁つた月である。公は不吉なものを見たやうに眉を顰め、再び室に入つて、氣になるままに灯の下で自ら筮竹を取つた。

翌朝、筮師を召して其の卦を判ぜしめた。害無しと言ふ。公は欣び、賞として領邑を與へることにしたが、筮師は公の前を退くと直ぐに倉皇として國外に逃れた。現れた通りの卦を其の儘傳へれば不

興を蒙ること必定故、一先づ僞つて公の前をつくろひ、さて、後に一散に逃亡したのである。公は改めて卜した。その卦兆の辭を見るに「魚の疲れ病み、赤尾を曳きて流に横たはり、水邊を迷ふが如し。大國これを滅ぼし、將に亡びんとす。城門と水門とを閉ぢ、乃ち後より踰えん」とある。大國とあるのが、晉であらうことだけは判るが、其の他の意味は判然しない。兎に角、衞侯の前途の暗いものであることだけは確かと思はれた。

殘年の短かさを覺悟させられた莊公は、晉國の壓迫と太子の專横とに對して確乎たる處置を講ずる代りに、暗い豫言の實現する前に少しでも多くの快樂を貪らうと只管にあせるばかりである。大規模の工事が相繼いで起され過激な勞働が強制されて、工匠石匠等の怨嗟の聲が巷に滿ちた。一時忘れられてゐた鬪雞戲への耽溺も再び始まつた。雌伏時代とは違つて、今度こそ思ひ切り派手に此の娯しみに耽る事が出來る。金と權勢とに饜かして國内國外から雄雞の優れたものが悉く集められた。殊に、魯の一貴人から購め得た一羽の如き、羽毛は金の如く距は鐵の如く、高冠昂尾、誠に稀に見る逸物である。後宮に立入らぬ日はあつても、衞侯が此の雞の毛を立て翼を奮ふ狀を見ない日は無かつた。

一日、城樓から下の街々を眺めてゐると、一ヶ所甚だ雜然とした陋穢な一劃が目に付いた。侍臣に問へば戎人の部落だといふ。戎人とは西方化外の民の血を引いた異種族である。眼障りだから取拂へと莊公は命じ、都門の外十里の地に放逐させることにした。幼を負ひ老を曳き、家財道具を車に積んだ賤民共が陸續と都門の外へ出て行く。役人に追立てられて慌て惑ふ狀が、城樓の上からも一々見て取れる。追立てられる群集の中に一人、際立つて髮の美しく豐かな女がゐるのを、莊公は見付けた。直ぐに人を遣つて其の女を呼ばせる。戎人己氏なる者の妻であつた。顏立は美しくなかつたが、髮の見事さは誠に輝くばかりである。公は侍臣に命じて此の女の髮を根本から切取らせた。後宮の寵姬の一人の爲にそれで以て髢を拵へようといふのだ。丸坊主にされて歸つて來た妻を見ると、夫の己氏は直ぐに被衣を妻にかづかせ、まだ城樓の上に立つてゐる衞侯の姿を睨んだ。役人に笞打たれても、容易に其の場を立去らうとしないのである。

冬、西方からの晉軍の侵入と呼應して、大夫・石圃なる者が兵を擧げ、衞の公宮を襲うた。衞侯の己を除かうとしてゐるのを知り先手を打つたのである。一説には又、太子疾との共謀によるのだともいふ。

莊公は城門を悉く閉ぢ、自ら城樓に登つて叛軍に呼び掛け、和議の條件を種々提示したが石圃は頑として應じない。やむなく寡い手兵を以て禦がせてゐる中に夜に入つた。

月の出ぬ間の暗さに乘じて逃れねばならぬ。諸公子・侍臣等の少數を從へ、例の高冠昂尾の愛雞を自ら抱いて公は後門を踰える。慣れぬこととて足を踏み外して墜ち、したたか股を打ち脚を挫いた。手當をしてゐる暇は無い。侍臣に扶けられつつ、眞暗な曠野を急ぐ。兎にも角にも夜明迄に國境を越えて宋の地に入らうとしたのである。大分歩いた頃、突然空がぼうつと仄黄色く野の黒さから離れて浮上つたやうな感じがした。月が出たのである。何時かの夜夢に起されて公宮の露臺から見たのとまるでそつくりの赤銅色に濁つた月であ

る。いやだなと荘公が思つた途端、左右の叢から黒い人影がばら〳〵と立現れて、打つて掛つた。剽盗か、それとも追手か。考へる暇もなく激しく闘はねばならなかつた。諸公子も侍臣等も大方は討たれ、それでも公は唯獨り草に匍ひつつ逃れた。立てなかつたために却つて見逃されたのでもあらう。

氣が付いて見ると、公はまだ雞をしつかり抱いてゐる。先程から鳴聲一つ立てないのは、疾うに死んで了つてゐたからである。それでも捨て去る氣になれず、死んだ雞を片手に、匍つて行く。

原の一隅に、不思議と、人家らしいもののかたまつた一郭が見えた。公は漸く其處迄辿り着き、氣息奄々たる様でとつつきの一軒に匍ひ込む。扶け入れられ、差出された水を一杯飲み終つた時、到頭來たな！　といふ太い聲がした。驚いて眼を上げると、此の家の主人らしい・赭ら顔の・前齒の大きく飛出た男がじつと此方を見詰めてゐる。一向に見憶えが無い。

「見憶えが無い？　さうだらう。だが、此奴なら憶えてゐるだらうな。」

男は、部屋の隅に蹲まつてゐた一人の女を招いた。其の女の顔を薄暗い灯の下で見た時、公は思はず雞の死骸を取り落し、殆ど倒れようとした。被衣を以て頭を隠した其の女こそは、紛れもなく、公の寵姫の髭のために髪を奪はれた己氏の妻であつた。

「許せ」と嗄れた聲で公は言つた。「許せ。」

公は顫へる手で身に佩びた美玉をとり外して、己氏の前に差出した。

「これをやるから、どうか、見逃して呉れ。」

己氏は蕃刀の鞘を拂つて近附きながら、ニヤリと笑つた。

「お前を殺せば、璧が何處かへ消えるとでもいふのかね？」

これが衞侯 朔 ※の最期であつた。

青空文庫情報

底本：「中島敦全集第一巻」筑摩書房
1976（昭和51）年3月15日初版第1刷発行
初出：「政界往来」
1942（昭和17）年7月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：米田進
校正：土屋隆
2008年12月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

盈虚

中島敦

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/